

二月の觀察

堀 七 藏

二月は一般に庭に出ることが困難であるから、動物園でつこをなさしめるさか、動物園をこしらへさせるやうな作業が面白い。動物園にゐる獸類鳥類等の實物を參觀させる

にこしたことはないが、いろいろの獸類や鳥類の標本や寫眞また繪畫などをよく觀させるがよい。勿論個々の獸類や鳥類の形態的習性を主とすべきもので、分類的な知識を授與するが如きことは禁物である。長鼻類ださか、肉食獸ださか、偶蹄類ださか、更に猛禽類ださか、涉禽類ださかといふが如き分類的な知識は、尋常小學校の理科に於ても程度が高いので取扱はれないのである。それを保母が知つてゐるからさて、また繪本などに書いてあるからして幼兒に教授したり説明したりすることは、幼稚園令施行規則第一條に

ある「幼兒ノ保育ハ其ノ心身發達ノ程度ニ副ハシムベク其ノ會得シ難キ事項ヲ授ケ又ハ過度ノ業ヲ爲サシムルコトヲ得ズ」の精神から見てもよくないことが明白である。

二

いろいろの獸類を觀察させて、それを繪でかき、厚紙を切り、また粘土で製作したりなきて、それを總合して動物園をつくる作業は幼兒の遊びとして、觀察、手技などを組合せた保育事項として、頗る面白い、次に參考として先づ獸類の形態の著しい點を説明するがこれを幼兒に教へるのではない。

(一) 猿類、多くは樹上に生活し、好んで果實を食ふ。四肢は皆手の用をなし、枝を握ることが出来る。前肢は後肢より長く、爪は扁平である。本邦には顔の赤尾の短い猿の一

種だけ産する。顔面赤く鼻低く顎が突出してゐる。頬嚢があつて食物を入れておき、後に徐々に食ふ。猿のしりだこは皮膚の上層角質層が厚く堅くなつたものである。一産一子にして子を愛する情が深い。性伶俐にして人に馴れ、諸藝を演ずる。

猿類にはい、やうじやう、くろしやうじやう、ゴリラ、手長猿、尾長猿等がある。

(2) 食肉類又は猛獸類には、いし、みら、へう、ねこ、いぬ、きつね、たぬき、おほかみ、いたち、かはうそ、くま等がある。いしは全身淡褐色、砂の色に近い。夜獸で、日中は多く原野に潛伏し、日没頃から出て餌を捕食する。雄にはたこがみがある。頸、四肢の筋肉強く肉を噛み裂くに適する。門歯は小で犬歯は強大である。趾の裏柔く、歩行の際音を生ぜず、靜かに餌に近くこぎが出来る。趾の末端には鋭き爪がある。

みらはアジアの特産である。支那、滿洲、朝鮮等にゐる。晝間は叢中に潛み、夜出でゝ食を求める。獸類の眠れる所を襲つて捕食する。體は鮮黄色で黒色の縦縞がある。

へうもアジアの産、森林中に棲む。全身の表面にある斑紋は木葉の影に紛れて、その所在が知られ難くなつてゐる。へうはいしやみらと異なり樹にのぼるこぎが出来る。

いぬ、きつね、たぬきはねこに似てゐるが、顎骨が長く口吻が突出し、爪を伸縮する装置がない。また樹上にのぼるこぎが出来ない。たぬきは一名むじなといひ、その毛皮は防寒用に適し高價である。きつねは穴居動物である。夜獸で性狡猾である。くろきつねの毛皮はらつこに次いで尊ばれる。おほかみはアジア、ヨーロッパの北部に産する。我國にゐるのはやまいぬである。ぬくては朝鮮にゐるおほかみで、背は稍々茶色、腹は灰白色である。胴は細長く、尾は下垂してその先が黒い。顎及び背には剛毛密生し、顔はきつねに似て口吻がこがり、四肢が比較的長く、耳も長い。人畜を咬殺する。

いたちは夜出でゝ鳥類等を捕へてその血を吸ふ。體長く四肢が短い。激しき惡臭あるガスを放つこぎがある。かはうそはいたちに似てゐるが、趾間に蹠があり、巧みに水中を遊泳して魚類を捕へて食ふ。

らいつこは北海に産する。形、いたちに似て遙かに大である。その毛皮は甚だ貴い。元來哺乳類の皮膚に生ずる毛には軟い毳毛と粗大な上毛とある。寒地に産するらいつこ、をつこせいなきは毳毛が甚だ軟く、且つ密生し、上毛が少いから毛皮として貴重せられる。

くまは猛獸類であるが雜食する。冬期は食はず動かず、半ば死せるが如くになつて冬眠する。津輕海峽以南に棲むものは體小さく、毛黒く、喉に月の輪がある。ひぐまはあかぐまと稱し、褐色の長毛を被る。北海道樺太に棲む。しろぐまは北極ぐまとも稱し、北方氷地に棲み、足の裏にも毛を生じ、猛獸中の最大なるものである。をつこせい、あいか、あざらしは水中に棲む。體は紡錘形で毛短く、四肢共に形鱗の如くなり、遊泳に適する。常に群をなして生活し、寒暖に應じてその住所を轉ずる。あしかには小さき耳殻があり頸が長い。をつこせいにも小さき耳殻があるが頸は短い。あざらしには耳殻がなく、後肢は歩行の役に立たぬ。

(3) 有蹄類は皆大形の草食獸である。四肢は細くして疾

走に適し、各肢は一二趾を有するのみである。馬の一本の趾は人の手に比すれば中指に相當し、牛の二本の趾は中指と薬指とに相當する。爪は全く趾端を包み、所謂蹄となる。

うまの門齒は上下顎共によく發達し、犬齒は殆んどなく、臼齒は大にして臼形で、咀嚼面廣く隆起が多い。剛き草葉を食ふ。齒は漸次磨滅し、咀嚼面の形狀が變化する。うさぎ、うまは體小さく耳が長い、ろばともいふ。

犀は身長三メートルに達する大獸で、アジア、アフリカの熱帶地方に産する。鼻上に角がある。この角は爪と同じく皮膚の上層の變化して成れるもので、骨がない。昔之を藥用に供し一角散と稱した。皮膚の厚くして堅きこゝ獸類中之に及ぶものがない。さいば各肢に三趾を有す。

牛は每肢二本の趾で地に接する。しかし短きもの二本は地に接しない。上顎には門齒犬齒共にない。兩顎の臼齒は頗るよく發達してゐる。嚙み直す。こゝを反芻といひ、反芻する動物を反芻類と稱し、牛、鹿、羊、山羊、かもしか、みなかい、らくだ、きりん等はこれである。

うしの角はひつじ、かもしか、やぎなどの角と同じく前

額骨から突出した骨の軸があつて之に表皮の角質化した鞘が被つてゐる。きりんキリンの角は毛の生へた皮膚をかぶれる儘である。是等の角は終生落ちぬ。

鹿の角は叉角カウと稱し、牛の角ホウは異り、枝があり全部骨質である。角の基部には皮膚で圍まれた角座があり、この部分の皮膚が次第に伸びてその中に軸骨が出来、角座の骨質コウシツに癒著する。而して外側の皮膚は軸骨が充分成熟するまで角の上を被ふて所謂袋角カウになつてゐる。しかし段々皮膚が乾燥するから自ら角を樹幹ジュカンなどにすりつけて之を剥落し、軸骨を露出するものである。叉角は年々落ちて生へかゝる。鹿は雄のみ角がある。鹿の蹄は勿論二つ地に接してゐる。

みなミナかひは雌雄共に叉角がある。樹木の生ぜざる地方に産し、雪に埋れた地衣類を角で掘つて食する。

らくラクだは角がなく、蹄が小で趾の裏面は柔かである。胃の一部に數多の小嚢が附著してゐるから、一度飲みたる水を永くこの中に貯へ數日飲まずとも渴すことがない、らくだには二種ある。一はアジアの中部及び東部に産するもの

で、その背に二つの峰がある。他はアフリカに産するもので、背の峰は一つである。

きりんキリンはアフリカの産で、體の高さ六メートル以上に及ぶ。肢も頸も長く、舌は細長く、その先にて高き樹木の新芽を巻取りて食する。

ゐミのしシは頭に角を生ぜず。胃は單一で反芻せず。牙が長い。ぶたブタはゐミのしシの飼養によつて變化したものである。

(4) 象、前肢後肢共に五本の趾がある。各趾が蹄を有し、蹄をつけて歩む。皮膚は厚く毛が少い。鼻は長く伸び、呼吸の嗅覺を司る外に、運動自在で手の如き用をなし、地上の物を拾ふ。そこで長鼻類ナシと稱せらる。牙は上顎に生ぜる門歯で、犬歯がない、下顎には前歯がない。印度象は額平に耳は小さい。よく人に馴れるから種々の勞役に使用せられ、又各種の藝を仕込まれる。アフリカ象はアフリカの中部に棲む。額圓く膨れ、耳極めて大である。象牙を採るために獵せられるのみで、人には馴れぬ。

(5) 鯨類は魚のやうに紡錘形で、前肢は鰭狀をなし、後

肢がない。尾は大にして水平に廣がつてゐる。一般に脊鰭もある。皮膚に殆ど毛がない。鼻孔は頭上にあつて所謂潮吹き孔である。鬚鯨類は齒がなくて鯨鬚のある種類である。さうくぢら、なかすくぢら、いわしくぢら、せみくぢら等の種類がある。また齒鯨類は齒のあるもので鼻孔は合一して唯一個である。まつかうくぢら、ごさうくぢら、いるか、いやち、一角等の種類がある。

(6) うさぎ鼠の類、犬齒がなく、前齒は前面のみ白色の珽瑯質で甚だ鋭く堅い物をよくかぢる。うさぎには上顎に門齒が四枚ある。のうさぎ、えちごうさぎ、えぞうさぎ、かいうさぎ等がある。上顎の門齒が二枚であるものにはりす、くまねずみ、はつかねずみ、こまねずみ、やまあらし、モルモット等である。りすは樹上に生活し、運動頗る活潑である。下顎の兩半を動かし、門齒を開閉して巧に堅果を破つて食ふ。むさびはりすに似てゐるが、四肢の間に膜があり樹間を飛ぶ。

(7) 翼手類 前肢が變形して第二乃至第五指の骨が甚だ長くなつて、體及び後肢と前肢との各指間とに膜が張つて

翼となつてゐる。胸骨には翼を動かす胸筋の附著點たる龍骨部がある。かうもりは小形で夜間飛び、昆蟲を常食とする。吻は短く拇指のみに鈎爪がある。樹のうろなぎに隠れてゐる。

(8) 食蟲類、はりねずみ、もぐら、やまもぐら、かはねずみの類である。もぐらは地中に棲んで蟲類を食する。はりねずみは背部の全面より短き棘を生じ、敵に遭へば身を縮め棘を外に向けて球形となる。

(9) カンガル、はオーストラリヤに産する。前肢は小さく、後肢は大で、尾が長い。後肢と尾とのみで直立して跳歩く。雌には腹の前面に袋があり、幼兒をその中に入れて育てるものである。

三

獸類と同じく鳥類についても觀察させ、繪にかゝせ、厚紙で切らせる等の作業をさせるがよい。

(1) わし、たか、ミビは鳥獸等の動物を捕へてその肉を食する。嘴爪ともに鋭くして鈎の如くに曲つてゐる。何れも翼の力強く飛ぶこゝろが巧で、且視力が強い。従つてよく

餌となる鳥獸を捕へ得る。

(2) ふくろふ、みみづくは嘴ミ爪ミの形狀が稍々たかに似てゐる。眼は他の鳥類ミ異なり、大きく圓形をなして前に向ふ。晝間は物を見るこゝ能はず樹の洞等の内に隠れて出ない。夜になるミ始めて飛出で、鼠かへる等を捕へて食ふ。羽毛の色著しからず、且翼の羽毛柔かにして飛ぶミ音を生ずるこゝなく、夜間小動物に近づき、これを捕へるに適するものである。

(3) きつつきの脚の趾二本は前に向ひ、二本は後に向ふ。樹木の幹をよぢのぼるこゝが甚だ巧である。嘴は長く眞直で、先端鋭くこれを用ひて樹に孔を穿ち中にゐる蟲類を捕へて食ふ。舌は極めて長く末端には後に向へる鈎があるから、深き孔の底にゐる蟲を捕へるに便である。尾の羽毛は軸堅くしてその端が針の如くに尖つてゐる、きつつきが直立せる樹幹に止まるミき、この尾を樹皮の表面に當て以て體を支へるのである。

(4) ほこぎす、脚の趾は二本前に向ひ、二本後に向ふ。嘴は長からず、その端が少し曲つてゐる。尾の羽毛の軸は

堅くない。他の鳥の巢に卵を一箇づゝ生み入れて置く奇性がある。あゝむは熱帶産で嘴は鈎狀に曲り、舌は肉質で太く巧に人語をまねる。

(5) 小鳥類、すゞめ、つばめ等の如き小鳥類にはうぐひす、ひばり、めじろ、ほゞじろ、やまがら、カナリヤ、こがら、ひがら、四十雀、五十雀、せきれい、みそさゞい、かはせみ、いすか、つぐみ、からす、もず、なご種類が甚だ多い。すゞめの如く穀類を啄むものでは嘴が太く、つばめの如く蟲類を食するものでは嘴が小さい。多くは巢を造るこゝが巧で雌雄共に雛を育てる。美しき聲に囀るものが多い、うぐひす、めじろ、カナリヤ、四十雀、山雀等、種類が多い。

(6) はこ、よく人に馴れる。親鳥はその餌糞より乳の如きものを出して雛を育てる。いへばこ、かはらばこ、傳書鳩、きじ、はこ、あをばこ、いらこばこ等がある。

(7) にはまり、きじ、くじやく類、脚強く常に地上を歩む。飛ぶこゝは巧でない。雌ミ雄ミは形狀又は色を異にし、雄の脚には趾よりも上の方にけづめミ稱する一本の爪があ

る。くじやくの雄は時々其美しき尾の羽毛を扇の如く開く。

(8) つる、さぎ類 共に水邊に棲み、浅き水底を歩みて魚類等をさがし食ふ。嘴、頸、脚ともに細長くしてかゝる生活をなすに適する。丹頂を稱するつるは體白く翼の後端のみ黒色で、頭の頂は赤く頗る美麗である。まなづる、なべづる、あねはづる、くろづる、そでくろづる、こぶのこり等がある。みやこざり、くいなもこの類である。しらさぎの蓑毛を稱する羽毛は裝飾に用ひられる。

(9) 水鳥。がん、かも、あひる、かもめ、おしどり等の水鳥は、趾の間に蹼を具へよく水を泳ぐ。あひるはかもを飼馴したもので飛ぶこぎが出来ないが、がん、かも、かもめ等はよく飛ぶ。

(10) かい、つぶりは巧に水中を潜つて魚を捕へて食ふ。趾扁たくして水をかくに適してゐる。翼は短くして遠く飛ぶこぎが出来ない。

(11) だて、うはアフリカに産する大なる鳥で、高さ二メートル以上にも及ぶ。翼は小にして飛ぶこぎが出来ない。脚は強大で、馬の如く疾走する。脚には二本の趾がある。

四

お魚屋遊びをなすためおさかな屋の店を見學させまた標本繪畫等によつて描しめて魚類を作らしめるもよい。勿論えび、かに、たこ、いかなごもはまぐり、あさりなども觀察製作させるのである。魚類さか軟體動物さかまた節足動物さか分類的な事項に拘泥する必要がない。幼兒が日常觀察してゐる觀念の發表でよいしまた概念を構成するのではなく觀念を明白になすこゝで満足すべきこゝ勿論である。

また八百屋遊びをなすために青物市場なり八百屋の店を觀察していろ／＼の野菜類や果物類の觀念を明白になすこゝも面白い。にんじん、ごぼう、大根、蓮根、くわる、いも、みつば、せり、キャベツ、菜類、ねぎ等の野菜類は勿論りんご、みかん、かき等の果物をも成るべく多く觀察させて八百屋ごつこの材料を製作させるがよい。その他いろ／＼幼兒の好む遊を總合的に行はしめるため呉服屋でも荒物屋でもまた家具店でも日常品を觀察せしめてその觀念を明白ならしめ之を描き作製して一層觀察を作業化し手技化するこゝが肝要である。